

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2015年9月1日発行
発行者 本多弘之
編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)
〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>
Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2015.9

第54号

新天地へ……願に生きよ、と。

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

仮の構造物（プレハブ）で試しに実践しようと立ち上げた「親鸞仏教センター」が、すでに発足から14年になり、手狭であることから移転できることを願ってきた。何件かの物件とのすれ違いのあと、たまたまこのたび、本郷三丁目の隣町、湯島二丁目にある建物が、大きさも場所もわれらの意向にぴったりの物件であり、建て主がその地で事業をされていて、われわれの研究センターの願いに共感して、喜んでお譲りくださることになった。

センターの所在地、本郷追分は、旧教学研究所東京分室の跡地であり、100年前には浩々洞が所在した場所の近所でもある。今回の移転先は、東京大学の南東側であり、本郷三丁目の駅から500メートルほどのところで、由緒ある所在地から2キロほど都心に寄った場所である。

親鸞仏教センターがこういう好条件の物件に恵まれるということは、現代の問題を学び現代の事情に応答しつつ、親鸞の思想信念を表現しようと試みる願いに対して、その意図を諸仏菩薩たちが応援してくださっているのだとも感じられるのである。

21世紀に入った現在は、交通・通信の発達で情報が地球を瞬時に駆け巡り、人的交流もいよいよ活発になっている。そういう状況に引き込まれた

からとて沈没するのでもなく、そういう事態と無関係に独り善がりの保身に閉じこもるのでもなく、しっかりと親鸞の発する信念を受け継ぎ、「心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」姿勢を堅持することは、まことに困難至極である。しかも、この困難な願いを都市空間に持続することは、砂地に水をまくような虚ろさと重なることでもある。

思い直せば、この願心は有限無能な個人の分限に存するものではなく、無限大悲の法蔵願心の領分のものである。親鸞聖人700回御遠忌記念講演で曾我量深師が出された「信に死し願に生きよ」の課題を、この新たなる場所をいただくことを縁として、いよいよしっかりと実践的に受けとめ直していかなければならないと思うのである。われらの立場は「凡夫」である。煩惱具足にして罪業深重であるままに、弘誓の大地に立ってこの困難な時代社会を共に生き抜いていく智慧と力を明示していくのである。「貧富貴賤を簡ばず、男女老少を問わず」、平等の大道を開示する教えを生き抜くのである。「願に生きよ」という勅命を聞くとは、平等に衆生を潤さんとする大悲心を信受し、「悲しきかな、愚禿鸞」の自覚を忘れず、共に凡夫であることを大切に生きていこうとすることであろうと信ずるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③③

闇と明るみが一体となる

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第81回と82回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第81回では「自然虚無の身、無極の体」等について、第82回では「涅槃の清浄性」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第78回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■私が聞く

回心せずに、つまり心を翻さないうまにたすかるわけにいかない。だから善導大師は、「謗法・聞提、回心すればみな往く」（『真宗聖典』277頁、東本願寺出版部）とおっしゃって、どうか心を翻して欲しいと。これが法蔵菩薩の呼びかけなのだ。それに触れるなら五逆・謗法もたすかるのだ。五逆・謗法ということは、あらゆる反逆者、倫理的な反逆をし、教えに反逆して、素直になれない存在です。そういう存在は一番たすかり難いものだけれど、それをもたすけたいのだと。

親鸞聖人という方は、そういう言葉を聞いて、もう自分はすぐたすかる、そういう悪い奴もたすかるのだぞという見方をするのではなくて、そういう呼びかけをしているということは、自分自身がそういう存在だと教えられるのだと。謗法・聞提は外にいるのではない。実は自分なのだ。如来の願いが呼びかける相手は私であります、法蔵菩薩の五劫思惟のご苦勞は私一人のためでありま

すと、このように教えを聞いていったのです。

これはなかなかできないのです。「ああ、よい教えだな。これをあの人にも教えてあげよう」という聞き方をわれわれはしてしまうのです。私が聞くというふうには、なかなか聞けない。われわれはすぐに自分のことではない、人のことになってしまうのです。何のために教えを聞くかということ、自分がたすかるのでなくて、人をたすけにいけるような自分になろうとする。それは名聞・勝他と言いまして、人に勝つために自分が智慧を身につけるといふ発想、これは煩惱ですから、煩惱で聞いたのでは元も子もないのです。でも、そういう聞き方しか人間はできないところがある。凡夫ですから。

そういうことを親鸞聖人は、大変自戒なさったのです。自分のなかに人をたすけようという心が起こらないわけではない。そういう心が起こった場合は、自分は愚かな凡夫なのに有情利益、人をたすけようなどと思うのは思い上がりだと。凡夫だからこそ如来の願いは私に向かって教えてくださるのだと。たすける力をもっているのは、仏陀であり大悲である。自分はたすけていただく。阿彌陀如来の光にみんなたすけていただくのだと。だから自分がそれをいただいているということ人を人に伝えることはできるけれど、まず自分がただかなければと、こういう態度を崩さずに、ずっと読まれた。ずっと聞き続けられた。

■迷いの自覚以外にさとりはない

曾我量深という方がおられたのですが、一般に

親鸞仏教センターの動き

(2015年5月～7月) 一抄出

「さとり」と言うと、何か修行をしたり、心を操作したりして、特殊な体験をもつ、「ああ、わかった」というような体験をもつことがさとりだと考える。けれども、人間の身として一人の心をよくよく見てみると、そういう体験をもつてたすかるというよりも、いかに深い迷いと煩惱をもって生きているかということを知らされ、迷いを本当に自覚させられるということ以外にさとりはないのだと。何かさとしてパッと明るくなったなどという一時的体験は、またすぐ煩惱で暗くさせられますから、煩惱で暗くさせられる状態である身を深く知らされる以外に、つまり迷いの自覚以外にさとりはないのだと、そのようにおっしゃったのです。

ですから、親鸞聖人にとっては、煩惱具足の凡夫という深い自覚がそのまま、如来の大悲のはたらきを受ける身として、光が当たる場として生きることができるという喜びに変わるわけです。

「機の深信」と言われる、^{こうごう}曠劫以来迷ってきた身でたすかる手だてはないという自覚が、そのまま、光によってたすかる身であるということと表裏一体なわけです。その裏の暗さを忘れて明るみだけになれるという妄念が、自力の菩提心です。凡夫の愚かさの自覚がないと、明るくなれるような気になるわけです。

この親鸞聖人の教えというものは、聞き始めたころは何といやな教えだろうと思ったものです。明るくなればよいではないかと。何でそんな暗いことばかり言うのだらうと。でも、だんだん触れるうちに、なるほど人間の心というものは、何かこうしつこいものだなと。決して本当の明るみになどさせないような意識がうごめいていて、後から後から闇を作っていく。自分で明るくなどできない。如来の大悲をいただいてみたら、闇のままに明るさがいただける。闇と明るみが一体となると言いますか、そういうことが親鸞聖人の喜びなのだとかわかってきたのです。

(文責：親鸞仏教センター)

■ 2015年

- 5/1 第25回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 5/8 親鸞聖人ご命日のつどい
第81回(通算第132回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 5/15 第154回清沢満之研究会
- 5/16 第23回日本近代仏教史研究会研究大会(大正大学):大澤研究員発表「近代的「人間親鸞」像と『歎異抄』一六角夢想の表象を中心に」
- 5/19 第50回現代と親鸞の研究会「沖縄を知る、日本を知る」牧師:平良修氏(港区・AP品川)
- 5/22 第175回英訳『教行信証』研究会
- 5/26 第12回『西方指南抄』研究会
- 6/1 第26回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 6/8 第176回英訳『教行信証』研究会
- 6/9 第82回(通算第133回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/12 親鸞聖人ご命日のつどい
- 6/15 第155回清沢満之研究会
- 6/23 第13回『西方指南抄』研究会
第13回親鸞仏教センター研究交流サロン「カルト問題を再考する—宗教の〈魅力〉と人間の危うさ—」立正大学心理学部教授:西田公昭氏、フォトジャーナリスト:藤田庄市氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/29 第27回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 7/2 第177回英訳『教行信証』研究会
- 7/5 真宗大谷派教学大会(大谷大学):藤原研究員発表「戦後の首我量深の中心課題—底流する第十七願と第二十願—」、名和研究員発表「清沢満之における「忘」の意義—『臙扇忌』を手がかりとして—」、中村研究員発表「「機法一体」説成立の再検討」、大澤研究員発表「康永本「伝絵」の絵相に見る覚如の意図—琳阿本・高田本との比較より—」
- 7/7 第156回清沢満之研究会
第83回(通算第134回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 7/8 第14回『西方指南抄』研究会
- 7/10 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7/17~31 安居本講(真宗本廟・大谷大学):本多所長「金剛信の獲得」
- 8/1 人事発令:越部良一、法隆誠幸が囑託研究員として再任

掲載論文

- 6月 『真宗教学研究』第36号
藤原研究員「『化身土巻』所引『日藏経』試論—光味仙人に注目して—」
『西田哲学会年報』第12号
名和研究員「西田哲学と親鸞教学—「逆対応」の可能性」

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第49回

終末期ケアにおける宗教の役割

—死にゆく人はさびしいか—

社会学者

上野 千鶴子 氏



上野千鶴子 氏

2015年4月7日、社会学者であり、現在は立命館大学大学院先端総合学術研究科特別招聘教授、NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長の上野千鶴子氏を迎え、「現代と親鸞の研究會」を開催した。これまで、フェミニズムの視点から、社会が孕む問題を鋭く突いてきた上野氏。誰もが迎える死に際し、われわれには具体的にどのような準備が必要で、またそのときをどのように迎えるのか、そしてそれらの問題へ宗教はいかにかわりうるのか。その課題に迫った。（親鸞仏教センター嘱託研究員 大澤絢子）

■家族介護神話

少子高齢社会の背後にあるのは晩婚化、非婚化です。日本における家族介護は嫁の介護力抜きにはこれまで果たされませんでした。そうした状況をいくら持ち上げても、失われた過去は望んでも二度と手に入りません。

昔の高齢者はその絶対数が少ない。それに対して家族の数が多。それから要介護期間が短い。感染症になったら、あっという間に死んでしまいます。それから介護水準が低い。現在の日本は栄養水準、衛生水準、医療水準、介護水準が世界的に見て高い水準にあります。それが、これだけの長寿社会を生んでいるのです。よって、以前の日本の家族に介護能力があったというのは嘘で、家族みんなに看取られての死を理想化してもらっては困るのです。

介護してくれる家族として今、トップにくるのが配偶者です。夫婦どちらかが先に倒れたら、残ったほうが介護せざるをえない。そして、夫の介護者が増えてきました。その次が娘です。娘は実家の親の介護負担から免れず、別居通勤介護者となっています。そして同居の息子です。息子は非婚率が高まっていますので、この人たちが高齢化して、さらに高齢の親の面倒を見ると、驚

くべき変化が見られます。その結果として家族介護者の男性比率が現在約3人に1人、もはや家族介護は女性問題とは言えなくなりました。また独居高齢者が高齢者世帯の約2割、高齢者夫婦世帯が約3割を占めます。もし夫婦どちらか片方が亡くなったら、いずれ独居高齢者になりますから、みんな最期はおひとりさまということになっていきます。これからは家族介護力をもはや期待できないということを前提にして、高齢者の在宅生活をどう支えるかという問いに私たちは解答を与えていかなければならないのです。

■予期できる死の増加

同時に死にも変わりました。死に方の順位上位3位は癌、脳血管疾患・心疾患、感染症、80代以上では老衰です。ピンピンコロリでは死ぬません。脳血管疾患・心疾患でも、リハビリしながら最後に致命的な発作が起きて死ぬまでの期間が長いのです。その間に誤嚥や感染症、肺炎などで死ぬのであって、昔の結核のような感染症とはまったく違います。超高齢社会の死はゆっくり死で、確実に予期できる死。これがかつての死との違いです。

■施設ではなく在宅で

日本の高齢者の持ち家率は非常に高く、八割を超えています。さらに、現代の人口減少社会では住宅が余っています。ですから施設もいりません。にもかかわらず施設が足りないという声があって、待機高齢者は、全国52万人だと言われます。しかし、施設入居の意思決定者は家族です。まれに自分の意志で入居高齢者がいますが、それも家族への配慮から入っています。すすんで施設に入る高齢者はいません。つくづく思うのは、家にいたいのはお年寄りの悲願だということ。これ

は現場に行くと本当にそう思います。

どなたに聞いても在宅死には、本人の強い意志、家から出て行ってほしいという周りの抵抗勢力を押し返す強い意志が必要だとおっしゃいます。しかし強い意思がいるのは、むしろ病院やホスピスに入るほうです。だからその決心を延ばしに延ばすほうがラクではないかと思えます。「ぐずぐず」と「だましまし」がキーワードと最近私は思うようになりました。特に介護保険ができてから十五年の間の家族の変貌^{ぼう}がとても大きく、最近現場で在宅ひとり死のための条件は何ですかと聞くと、少し答えのニュアンスが変わりました。反対する家族などの関係者が少なければ少ないほど、在宅での看取りがやりやすいとプロが言うようになりました。

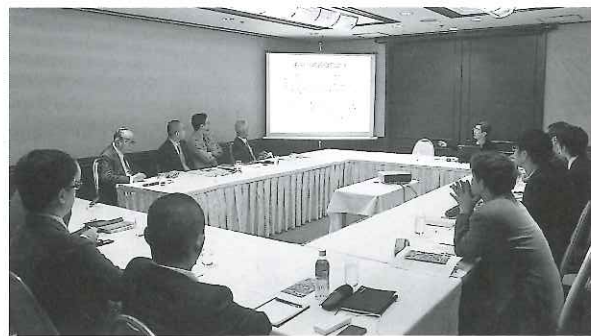
■在宅死の条件

24時間対応の訪問介護、訪問医療、訪問看護の三点セットがあれば、自宅で死ねます。このうち最も大事なものは介護力です。食事介護、排泄介護、入浴介護、この三大介護が最後まで維持できれば在宅生活は可能です。それに加えていつでも対応してくれる医療と看護、なかでも大切なものは看護で、医者が必要なのは死亡診断書を書くときだけです。

在宅死の条件として、現在得られるほぼ共通の答えがまず、本人の意志です。その次は介護力のある同居家族がいることと、今のところはおっしゃいます。三つ目に、地域に利用可能な医療介護資源があるということ。それから介護保険のプラスアルファの費用。それさえ出せば家にいられる。家族介護でこれまでサポートしてきたところを自費負担の介護資源で補えばなんとかなる。そうなると、これまで在宅介護は家族介護とイコールでしたが、在宅介護から家族を引き算できれば、家族のいない人にも在宅介護という選択肢ができるようになりました。

■宗教者の役割

インフラが整ったとしても、死にゆく人のさびしさや孤独感、それはいったい何によって解消することができるのでしょうか。ホスピスのパイオニアは、ほとんど宗教関係の団体でした。そして、医者がやらなくてもすむことを宗教家が引き受けてきました。しかし、専門別に分業すればすむのか。「先生、死んだらどこへ行きますか」と患者に聞かれたとき、医者が「私にはわかりません。そ



現代と親鸞の研究会 於：東京ガーデンパレス

の話は宗教者に聞いてください」と言っているのかということやはり考える必要があると思えます。医者がスピリチュアルケアまで引き受けなければならないと思う必要があるのか。医者も宗教的な死生観をもつべきなのか。外国ならば宗教家の出番があるところに、日本にはその宗教家の出番が少ないので、医者が過剰な負担を背負わされているのではないのでしょうか。

(文責：親鸞仏教センター)

※上野氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第32号(2016年6月1日号)に掲載予定です。

上野 千鶴子(うえの ちづこ)氏

社会学者

1948年生まれ。京都大学文学部哲学科社会学専攻卒業。社会学者、立命館大学大学院先端総合学術研究科特別招聘教授、東京大学名誉教授、認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)理事長。社会学博士。

著書に、『構築主義とは何か』(勁草書房)、『サヨナラ、学校化社会』(太郎次郎社)、『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』(平凡社)、『差異の政治学』(岩波書店)、『国境お構いなし』(朝日新聞社)、『上野千鶴子が文学を社会学する』(朝日新聞社)、『老いる準備—介護することされること』(学陽書房)、『生き延びるための思想』(岩波書店)、『おひとりさまの老後』(法研)、『男おひとりさま道』(同)、『ひとりの午後に』(日本放送出版協会)、『女ざらい—ニッポンのミソジニー』(紀伊國屋書店)、『不惑のフェミニズム』(岩波書店)、『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』(太田出版)、『みんな「おひとりさま」』(青灯社)、『〈おんな〉の思想—私たちは、あなたを忘れない』(集英社インターナショナル)、『女たちのサバイバル作戦』(文藝春秋)、『身の下相談にお答えします』(朝日新聞出版)、『ケアのカリスマたち—看取りを支えるプロフェッショナル』(亜紀書房)、『セクシュアリティをことばにする』(青土社)など多数。共著の『上野千鶴子が聞く小笠原先生、ひとりで家で死ねますか?』(朝日新聞出版)を本研究会の参考図書としてご紹介いただいた。

また、親鸞仏教センター情報誌『anjali』第16号に「最後はひとり」をご執筆いただいている。

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第50回

沖縄を知る、日本を知る

牧師
平良 修氏



平良 修氏

2015年5月19日、東京のAP品川において、牧師の平良修氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。現在、普天間基地の辺野古への移設やオスプレイの配備、離島への自衛隊の配備など沖縄に関するさまざまな議論が起きている。氏は沖縄で生まれ育ち、現在も沖縄に身を置きながら、信仰の立場から沖縄の問題に精力的に取り組んでいる。

今回は「沖縄を知る、日本を知る」をテーマに語っていただいた。ここに、その一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 大谷一郎)

■人間の存在の重さ

太平洋戦争が終わったとき、私は中学生でした。敗戦後、疎開先の台湾からすぐに故郷の宮古島に戻りましたが、しばらくして、友人が私を宮古島の教会に連れて行ってくれました。私はそこで、笑みを満面に浮かべて確信をもって語る牧師に出逢いました。それまでの私は、天皇のためにすべてを捧げることが最高の善であり、最高の義であり、最高の愛であるような価値観で養われていましたが、その牧師は、教育勅語でなく聖書による新しい価値観を示されたのです。新しい人間の在り方、生き方、そういうものを示され、私はとても惹かれ、これに賭けようと思いました。

私は、聖書により自分というものの決定的な意味、深い意味において自分というものを知らされ、そして人間というものを知ることができたと思っています。例えば、旧約聖書のなかにイザヤという預言者がいますが、彼は、自分は母親の胎内にいたときから神に知られていたのだと言っています。また、新約聖書では、パウロという人は、自分は天地創造の前から神に知られていたと言っ

ています。これはつまり、天地創造の神が、あなたが人生を生きるために地球を創るのだ、と言っているということではないでしょうか。私は、その深みにおいて私というものの存在を確認することができたのです。私は軽い存在ではない、私のために天地創造があったのだと言ってもいいくらいに重い存在なのだ。しかも、それは私一人のためだけではなく、皆同じです。その深みにおいて自分自身を正しく尊重し、また、隣人を同じように大事にして共に生きるということ。このことが聖書によって私の新しい人間理解として与えられました。

聖書に、ある人がキリストに神の戒めのなかで一番大事なものは何かと問う場面があります。それに対してキリストは、第一の戒めは、全身全霊をあげてあなたの主たる神を大事にすることであり、第二は自分自身を大事にするようにあなたの隣人を大事にすることである。すべての戒めはこれに含まれるのだと答えられました。これは、目に見えない神を大事にすることは、目に見える人間を大事にするというかたちを通してしか証あかしできないということです。私は、人間を大事にする価値観に立ち、皆と共に生き、語っていきたいと思ったのです。

■高等弁務官就任式での祈り

1966年に第5代の高等弁務官が沖縄に派遣されました。私はその就任式に立ち会い祝福の祈りをしてほしいという依頼を受けました。なぜ私が呼ばれたのかと言いますと、私はアメリカ軍のチャペルの奨学金を受けて神学校で勉強したという経

緯があり、沖縄の牧師になってからも米軍のチャペルと親しくしていました。またアメリカから帰ったばかりで英語が話せるということもあったのでしょう。私はその高等弁務官の就任式の祈りのなかで、あなたが最後の高等弁務官であるように、と祈ったのです。これは大センセーションを巻き起こしました。イエス・キリストという方はご自分の権能を上から支配するというかたちでは決して用いなかった。人々の足を洗うというかたちでご自分の権能を示された方だった。彼にはその権能の用い方を習ってほしいと私は訴えたのです。

軍事力をもって沖縄の民衆を支配しようとしているその体制に対して、私ははっきりと公的に全面的に否を突き付けたのです。弱いものと共にいること、虐げられた者と共にいるということ、決して支配する者の側に立たないということがキリストの道だと思います。それはキリストを信じ、キリストに仕えようとする者の道でもなければならぬと思うのです。

■ 沖縄から日本を見るということ

私は、日本人が日本という国を知る一つの大切な切り口として沖縄があると思っています。沖縄という切り口を通して見る日本という見方が当然ではないと思っています。つまり、沖縄という鏡に映っている日本という国はどのような国に見えるかということです。

「あなたは自分のことを日本人だと思いませんか」、という質問は皆さん方の出身地ではありえる質問でしょうか。たぶん普通にはありえないでしょう、当たり前のことですから。しかし、この奇妙な質問が可能なのは沖縄なのです。以前、西銘順治にしめという沖縄県の知事が、「沖縄の心とは日本人になりたくてもなりきれない心だ」と言いましたが、どこかで日本人になろうと思ってもなりきれない、邪魔するものがあるわけです。その大きな理由の一つはやはり歴史の違いだと思います。沖縄はかつて琉球王朝が約五百年間続いた歴史をもっています。そして独特の文化、言語があります。またそれとは別に、政治的な理由もあると思います。それは琉球処分です。そして、それ



現代と親鸞の研究会 於：AP 品川

に端を発した植民地扱いに対する違和感、不信感、反感です。日本という国は、本当に信頼できるのか、自分たちと本当に血と肉を共有しているところの一つの身体だと言っているのかということとです。

■ 米軍基地の問題

ご承知のとおり、沖縄は全国の土地面積の0.6%しか面積のない狭いところですが、そこに全国の米軍基地の74%があるのです。日本全国を100人の村に例えるなら、沖縄がひとりで74を負担し、他の99人で26しか負担していないということになります。これはおかしいことでしょう。その不条理が当然のことのように通っていることを異としない日本政府、またそれを支えている圧倒的多数の日本国民は、沖縄からは非人間的な存在にすら見えます。悲しいことです。

(文責：親鸞仏教センター)

※平良氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第32号(2016年6月1日号)に掲載予定です。

平良 修(たいら おさむ)氏 牧師

1931年12月15日、沖縄・宮古島生まれ。琉球大学英文科中退後、東京神学大学卒業、ジョージ・ピーボディ教育大学留学。沖縄キリスト教短期大学学長、日本基督教団佐敷教会牧師、日本基督教団宮古島伝道所牧師を経て、沖縄教区合同問題特設委員長、沖縄キリスト教センター運営委員長、一坪反戦地主会代表世話人などを歴任する。現在、日本基督教団無任所教師、沖縄人権協会理事。

著書に『沖縄にこだわりつけて』（新教出版社）、『小さな島からの大きな問い—キリストとオキナワにこだわる一牧師の平和論』（新教出版社）など。

でも平等に救い遂げようという「大乘」の教えと、自分一人が悟ることを目指す「小乗」の教えがあり、これらの教えを説いた経典をすべて「修多羅」と言います。ただ、今ここで世親が言っているのは大乘の「修多羅」のことで、小乗のそれではありません。阿弥陀の本願を説く三部の経典——『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』——は、大乘の「修多羅」です。世親は、この三部の大乘経典に依る、と言います。それはつまり、憂いや迷いに引きずられるがままに生きるのではなく、あらゆる人が救われてほしい、という阿弥陀の本願を依りどころにすることなのです。「真実功德相」の「真実功德」とは「南無阿弥陀仏」であり、「相」とは「かたち」です。「必ず救おう」という阿弥陀の誓いが、「南無阿弥陀仏」という言葉として私たちの前に示されているのです。

原文

「願生安楽国」というは、世親菩薩かの無碍光仏を称念し、信じて安楽国にうまれんとねがいたまえるなり。「我依修多羅 真実功德相」というは、我は天親論主のわれとなりのたまえる御ことばなり。依はよるといふ、修多羅によるとなり。修多羅は天竺のことば、仏の経典をもうすなり。仏教に大乘あり、また小乗あり。みな修多羅ともうす。いま修多羅ともうすは大乘なり。小乗にはあらず。いまの三部の経典は大乘修多羅なり。この三部大乘によるとなり。真実功德相といふは、真実功德は誓願の尊号なり。相はかたちといふことばなり。

（『真宗聖典』五一八頁）

第13回

親鸞仏教センター研究交流サロンを開催 （6月23日）

当センターでは、さまざまな分野の有識者と、共通のテーマで意見交換ができる場として、「研究交流サロン」を開催している。

今回は、東京国際フォーラム（千代田区）を会場に、「カルト問題を再考する—宗教の〈魅力〉と人間の危うさ—」というテーマで、西田公昭氏（立正大学心理学部教授）からの発題後、藤田庄市氏（フォトジャーナリスト）の発言を皮切りに、約30名の参加者と意見交換を行った。

まず西田氏は、オウム真理教信者の深層を紹介しつつ、破壊的カルトについて詳説し、「カルトは人権侵害である」ことを明示。そして、カルト入会までの若者の心理を説明し、イスラム国（ISIL）に若者が入っていくこととの類似点にも触れた。さらに、入会者がマインドコントロールによりカルトに支配され、人権を侵害する側にまでなる構造について語り、「現代社会が未来の担い手に何を語るのか、自由と人権について今以上に考えて

いかなければならない」と提言して発題を終えた。

続いて藤田氏は、オウム真理教の後ろ盾となった有識者について言及。カルトを考えると一番大事なことから「スピリチュアル・アビューズ（霊性虐待）」を挙げ、「このことをきちんとふまえていないと、『一見もっともらしい』カルト側の論理に宗教者や学者も流されてしまう」と、その危険性を指弾した。

意見交換では、伝統教団の修行や伝法とカルトの区別。伝統教団の役割。学生にカルトを見抜く力を養わせることの重要性など、各分野から積極的な意見交換がなされ、盛会のうちに幕を閉じた。



「天親菩薩の銘文」(三)

自分にとってかけがえのない、大切な言葉はあるだろうか。書物はどうか。今や、世界が情報化し、流行りすたり、移り変わりの激しい時代である。たった一つの言葉、一冊の書にこだわるなどナンセンスだという指摘が飛んでくるかもしれない。

しかし、天親によれば、釈尊の説いた経典とはどこまでも、「自らが本当に依るべきもの」である。ここで「依る」とは、都合よく他をあてにすることではない。ごまかしのない真実を前にした、自らの立つべき場所の確認である。自身の存在そのものが収束する一点であり、かつそのことを私たちに知らしめる言葉を、「南無阿弥陀仏」と言つ。

(元研究員 内記洸)

現代語

「願生安楽国」というのは、世親菩薩が「安楽国」、つまり阿弥陀の世界に生まれようと願っておられるのです。無碍光仏の名を称え、その誓いを信じるところに、「私の国に生まれてほしい」という如来の願いが世親自身の身に響いたので。

「我依修多羅 真実功德相」の「我」とは、著者である天親が「私のこの身において」と名のつておられる言葉です。「依」は依る、ということ、で、「修多羅」を依りどころとする、ということです。「修多羅」(sutra)とはインドの言葉で、お釈迦さまが説かれた経典のことです。仏教には、どんな人間

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆無碍光仏を称念し、信じて安楽国に生まれんとねがいたまえる

■その仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲せば、みなことごとくかの国に到りて自ずから不退転に致る、と。
(一五八頁「行巻」『大経』)

◆依 / よる

■「何の故にか依る」は、如来すなわち真実功德の相なるをもつてのゆえに。
(一七〇頁「行巻」『論註』)

■かの罪を造る人は、自らが妄想の心に依止し、煩惱虚妄の果報の衆生に依つて生ず。この十念は、無上の信心に依止し、阿弥陀如来の方便莊嚴・真実清淨・無量功德の名号に依つて生ず。
(二七四頁「信巻」『論註』)

◆真実功德相 / 誓願の尊号

■「真実功德相」は、二種の功德あり。一つには、有漏の心より生じて法性に順ぜず。いわゆる凡夫人天の諸善・人天の果報、もしくは因・もしくは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。このゆえに

不実の功德と名づく。二つには、菩薩の智慧・清淨の業より起りて仏事を莊嚴す。法性に依つて清淨の相に入れり。この法顛倒せず、虚偽ならず、真実の功德と名づく。
(二七〇頁「行巻」『論註』)

■この如来を、南無不可思議光仏とももすなり。この如来を方便法身とももすなり。方便ともうすは、かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめたまうをもうすなり。すなわち、阿弥陀仏なり。
(五四三頁「念多念文意」)

原文

「説願偈総持」というのは、本願のころをあらわすことばを偈というなり。総持というは智慧なり。無碍光の智慧を総持ともうすなり。「与仏教相応」というは、この『浄土論』のころは、釈尊の教勅、弥陀の誓願にあいかなえりとなり。「観彼世界相 勝過三界道」というは、かの安楽世界をみそなわずにほとりきわなきことと虚空のごとし。ひろくおおきなることと虚空のごとしとたとえたるなり。

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆総持 / 無碍光の智慧

■「説願偈総持 与仏教相応」は、「持」は不散不失に名づく。「総」は、少をもつて多を摂するに名づく。

(二七〇頁「行巻」『論註』)

■設い我仏を得たらんに、十方無量・不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍・もろもろの深総持を得ずは、正覚を取らじ、と。

(二四五頁「信巻」『大経』)

◆相応 / 釈尊の教勅、弥陀の誓願にあいかなえり

■「須臾に西の岸に到りて善友あい見て喜ぶ」というは、すなわち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪廻し迷倒して、自ら纏うて解脱に由なし、仰いで釈迦発

(『真宗聖典』五一八〜五一九頁)

原文

「親仏本願力 遇無空過者」というは、如来の本願力をみそなわずに、願力を信ずるひとはむなしく、ここにとどまらずとなり。「能令速満足 功德大宝海」というは、能はよしという、令はせしむという、速はすみやかにという、よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人の、そのみに満足せしむるなり。如来の功德のきわなくひろくおおきに、へだてなきことを大海のみずのへだてなくみちみてるがごとしと、たとえたとまつるなり。

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆親 / 如来の本願力をみそなわず

■「今信知弥陀本弘誓願 及称名号」というは、如来のちかいを信知すともうすころなり。「信」というは、金剛心なり。「知」というは、しるといふ、煩惱業の衆生をみちびきたまうとするなり。

また知というは、親なり。ころにうかべおもうを、親という。ころにうかべしるを、知というなり。

(五四五頁「二念多念文意」)

◆遇無空過者 / 願力を信ずる人はむなしく、ここにとどまらず

■「遇」は、もうあうという。もうあうともうすは、本願力を信するなり。「無」は、なしという。「空」は、むなしくという。「過」は、すぐるといふ。「者」は、ひとという。むなしくすぐるひとなしというは、信心あらんひと、むなしく生死

にとどまることなしとなり。

(五四三〜五四四頁「二念多念文意」)

◆功德大宝海

■「海」というは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆傍闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、これを海のごとくに喩うるなり。良に知りぬ、経に説きて「煩惱の水解けて功德の水と成る」と言えるがごとし。

(一九八頁「行巻」)

■「功德」ともうすは、名号なり。「大宝海」は、よろずの善根功德みちきままるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらす、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。

(五四四頁「二念多念文意」)

「天親菩薩の銘文」(四)

私たちはどこか、自分だけのもの、自分だけの居場所を求める。機能的であることが要求され、その意味で能力さえあれば誰でもいいようなこの社会のなかにあって、「この自分こそ」という欲求は私たちのなかで静かに、しかし確かに燃え続ける。はたして、この欲望に果てはあるのか。

親鸞によれば、天親の詠ったこの「偈」は天親という人物の偉大さを示すものではない。それは一個人の自己表現であることを超えて、阿弥陀の「ごころ」と響き合つ。個を破つて、仏の智慧の光が輝き出る。自分を本当に満たすのは、自分ではない。「俺が、俺が」と訴えるこの身が照らし出されるところが、自分の依るべき場所となる。

(元研究員 内記光)

現代語

「説願偈総持」というのは、阿弥陀の「本願」が私たちに何を呼びかけようとしているのか、その「ごころ」を表す言葉を「偈」というのです。「総持」とは「阿弥陀の智慧」です。「無碍光の智慧」、つまり執着せずには生きられないこの身を破つてはたらく光の智慧を、「総持」というのです。

「与仏教相応」というのは、世親が詠い上げた、この『浄土論』の「ごころ」が決して個人的な、独り善がりなものではない、ということなのです。それは、お釈迦さまが私たちに語った「教え」、すべての人を救いとりたいと誓った阿弥陀仏の「ごころ」にぴったり重なったものである、ということなのです。

「親彼世界相 勝過三界道」というのは、世親が阿弥陀の誓う「安樂世界」をご覧になって、どこまでも果てしなく、広く大きく、まるで大空のようだ、と譬えておられるのです。

「天親菩薩の銘文」(五)

「自分の人生にどれくらい満足していますか。」「あなたは本当に幸せですか。」こうした問いかけに対してどこか心穏やかでないのは、私たち自身、いつも「満たされたい」と思っているからだ。自分が空っぽになってしまわないように、いつも何かで埋めておかなばならない。

この空しさが完全に埋まることはあるのだろうか。この問いに親鸞は、「功德の大きな宝の海」という言葉でもって応える。どこまでも広がる海は、どんなものでも分け隔てなく摂めとって果てがない。ちっぽけなこの身を超えて、限りなく海が満ちる。阿弥陀の本願に出遇うとは、立場や境遇の違いを超えて、本当の満足に出遇うことなのだ。

(元研究員 内記光)

現代語

「親仏本願力 遇無空過者」というのは、如来の本願のはたらきに眼が開かれ、そのはたらきが心にありありと感じられてみると、ということなのです。今、ここにこうして生きていて、ということの本当の意味を知らずに終わっていくならば、人生とは何と「空しい」ものでしょう。しかし、阿弥陀の願いがこの身にはたらいているのだと信じるなら、そのような生きざまにとどまることは決してなく、その迷いの命を超えていけるのだ、ということなのです。

「能令速満足 功德大宝海」というのは、「能」はできる、「令」はさせる、「速」はたちまちに、ということなのです。本願のはたらきを確かに信じることでできた、まさにその瞬間に、「大いなる宝の海」のような「功德」をその人のからだに満たすのです。「海」は広く大きく、どんなものであっても分け隔てなくすべて摂めとってしまいます。如来の功德もこの海のように広く大きく、どうにもならない私たちの身を決して分け隔てすることがない、と譬えているのです。

第12回

「親鸞仏教センターのつどい」を開催 (4月14日)

今年も当センター仏間での勤行後、「学会館」（千代田区）を会場に講演と交流懇談会を行い約80名が集った。

講演では、NPO法人「場の研究所」所長の清水博氏（写真上）が、「自己組織する地球の〈いのち〉—人間の死生観を越えて—」と題し講演。東日本大震災からの復興に言及しつつ、〈いのち〉の居場所には〈いのち〉のドラマが生まれることを説明。さらに、「与贈」という造語を用いて「〈いのち〉の与贈循環」という考え方を提唱。「地球における生きものの死は内在的な縁の世界に受容され、縁の世界を広げて新しい〈いのち〉の与贈循環を生成して、〈いのち〉のドラマを進める歴史的な推進力となっている。」と人間の死生観を越える〈いのち〉のドラマの原理（共存原理）を力強く語った。

続いて、本多弘之氏が「共に大悲の「場」を生きる」と題して、善導大師の「帰三宝偈」から「共発金剛志」の一句を展開。「われわれが共存原理を回復するには、法蔵願心が立ち上がる場所に「共に」と言える大地を

見いだすことが重要。願心ははたき続けている。信心を獲ることで迷いのいのちが断絶するということが、死んでからではなく、今、ここに成り立つ」と「横起」の内容を詳説しつつ語った。

引き続き行われた交流懇談会では、三島多聞参務の挨拶の後、帯津三敬病院名誉院長の帯津良一氏より祝杯の辞をいただき開宴。席上、加藤智見氏（東京工芸大学名誉教授）、蜂屋邦夫氏（東京大学名誉教授）、平松園枝氏（ウィルプロジェクトジャパン代表・ワイズジャパン代表）、草野顕之氏（大谷大学学長）から、当センターへ激励の言葉をいただいた。

※記念講演の詳細は、『現代と親鸞』（第32号・2016年3月1日号）に掲載の予定です。



リレーコラム

「近代学術の足跡を尋ねて」第4回 (巣鴨監獄)

繁華街池袋を象徴する高層ビル、サンシャイン60。そこにはかつて、多くの戦犯を収容した「巣鴨プリズン」があった。今、その脇にある東池袋中央公園には「永久平和を願って」と記された碑が残される。

さらにさかのぼる明治31（1898）年9月、この地で仏教界を揺るがす大事件が起こる。それは巣鴨監獄教誨師事件。巣鴨監獄の署長が、在勤中の真宗大谷派教誨師を、4名のうち1人を残して退職させ、代わりにキリスト教教誨師を入れようとしたこの事件から、キリスト教と仏教、また国家と宗教との関係を問うて、全国的に議論が沸騰することになる。

そんななか、『織田仏教大辞典』の著者織田得能は檄文を飛ばし、真宗大谷派から除名処分を受けるなどの事件も起こった。当時、三河の自坊にいた清沢満之も、日記『臘扇記』での思索のなか、しばしばこの事件を記している。

今では忘れ去られたかのような明治の大事件。当事者各人の胸中にあったものは何であったか。（藤原）



東池袋中央公園

行事日程のご案内

■ 親鸞思想の解明

日時：2015年9月 休講
10月9日（金）18時30分～21時
11月9日（月）18時30分～21時
会場：東京国際フォーラム ガラス棟（G棟）

■ ご命日のつどい（毎月第2金曜日）

日時：2015年9月11日（金）10時～11時30分
10月9日（金）10時～11時30分
11月13日（金）10時～11時30分
会場：親鸞仏教センター会議室
上記共に、事前申込み不要・無料です。

あとがき

▼所長の巻頭言にもあるように、親鸞仏教センターの施設拡充構想から3年、時間がかかったが、センターの移転先が決まった。来年4月の開所を目指し、建物のリフォームを進める予定。新施設でも、より積極的に事業展開を図り、現代の問題に格闘している方々と対話を深めていきたい。▼本紙発行時には安全保障関連法案が成立しているであろう。70年間戦争をしてこなかった日本が、戦争の記憶が薄れるに従い、少しずつ戦争ができる国になってきた。ISIL問題、ギリシャのデフォルト、中国の株価急落や海洋進出、韓国に対する感情など、何か先行きが見えないことが重なってきているようだ。歴史を繰り返さぬよう、戦争は憎悪しか生まれないと言いつけねばならない。（金石）